《特別講演》

ケベック文学とキッチュ
——現実を直視できない『束の間の幸福』の登場人物——

小　畑　精　和

前書き

人間は現実を加工して捉える。それを小説において表現していくのは，科学の進歩により，世界を解読できると思い始めた人間の自負であろう。

古典主義は，「現実＝真実」よりも「真実らしさ」の方に価値を置いた。現実は事物をあるがままに表しているが，芸術は物事のあるべき姿を表さねばならないと古典主義者は考えた。例えば，騎士は勇敢で忠誠心がなければならない。女性は貞淑でなければならない。しかし，現実には臆病で裏切り者の騎士も多いし，不貞な女性も少なくない。古典主義の下では，理想的な騎士や姫様こそが描かれるべきで，こうした状況では，小説は芸術と認められ難い。

近代社会では，現実を重視する小説が王座を奪う。フランスに目をやると，バルザックはフランス革命後の上昇期のブルジョワ社会を活写した。そこでは善悪，美醜の枠を超えて，金銭で動く人間が描かれた。近代資本主義社会を支配しているのが金銭であることは論ずるまでもなかろうが，近代以前の社会で金銭は汚いものとして扱われ，愛情や，信義，忠誠などに基づいて行動する人間をこそ文学は描くべきだとされてきた。それにたいして，「世の中をありのままに見ることがすべてのはじまりだ」というヴォートランの台詞はバルザックのレアリスムを代弁している。様々な思惑の背後には金銭欲が潜んでいることをバルザックの小説は暴き出し，それにより読者はこの世がきれいごとだけでないことを認識し，それが世間の常識になっていった。それまでの常識で汚いものであった金銭はこうして社会の表側でも認知されていくようになる。

しかし，カトリック教会によってアイデンティティを長く守られてきたケベックで，英系に経済を支配されている現実をどうとらえればよいのか，作者も登場人物も最初はとまどうばかりであった。見えにくい現実を直視できず，既成の価値観を無反省に受け入れ，それに基づいて馴致された世界のイメージに迎合する態度をわれわれは広くキッチュと呼びたい。キッチュの定義に関してはあとで述べたいと思う。

この小論ではキッチュという概念を用いて，ケベック小説において現実を客観的に見ることがいかに困難であったのか，その一端を『束の間の幸福』を例として見てみたい。

1.『束の間の幸福』を取り巻く歴史的・社会的環境

1753～1760年の植民地戦争に敗れて，イギリス領になって以来，ケベックはカトリック教会を中心に閉鎖的な村社会で信仰とフランスの伝統を守ってきた。ルネ・ディオンヌは，アンリ＝レイモン・カスグラン神父の長文を引用しながら次のように要約している[1]。「フランス系カナダ人の運命は政治的でも経済的でもなく，文化的で精神的なものなのである。精神的に健全なカトリックであるフランス系カナダ人はプロテスタントで物質主義のアングロ・サクソンに最後に勝つのだ，なぜなら精神は必ず物質に勝利するものだから」と。こうしたメシアニスムがフランス系カナダ人の「生き残り」を支えてきたのである。カトリック教会を中心としたこの精神論は，1960年代の「静かな革命」まで根強く続いていく。

モーリス・アルガンは1940～50年代ケベックでいわゆる「心理小説」の登場人物が十全に生きるのを妨げている三つの要素を挙げている。宗教と家庭と過去である[2]。ケベックにおける伝統的価値の拠り所としてカトリックがあり，伝統を守り継続させていく「生き残りの哲学」の権化として母があり，変わることのない，変わってはいけない神話的過去が最後にある。アルガンは，植民地状況から解放される過程と小説作品を関連づけて，フランス系カナダ文学からケベック文学への「進化」を見ている。その際彼が参照しているのは，1950年代アフリカの独立運動であり，アルベール・メンミの言である。メンミも，伝統が支配者から非支配者を保護するとともに，近代化を妨げる要素としても働くことを指摘し，「避難所」的価値valeurs-refugesと呼んでいる[3]。

二十世紀に入り，自給自足的な農村社会にも市場経済が入り込んでくる。ケベックでも，二つの世界大戦を通して工業化・都市化が進んでいくが，その反面，小説は土地と結びついた伝統に執着していた。大恐慌の影響が色濃い一九三〇年代には，『三十アルパン[4]』のように現実小説の先駆けといえるものも現れるが，『木流しの大将ムノー[5]』に見られるように『マリア・シャプドレーヌ[6]』に代表される精神論がまだ幅を利かしていた。ようやく1940年代になって，『ゆるやかな坂の下[7]』や『束の間の幸福[8]』など，都市を描く小説が生まれ，ケベックの現実を直視しようとする傾向が現れる。

一般に，社会の近代化とともに，神に替わって人間は科学の力で世界を読みとれると信じ，現実を絶対的な視点から客観的に描こうとする小説を生み出す。それとともに，神に委ねていた人生を，人間は自分自身で見直さねばならなくなった。こうして，現実指向が強まり，現実的小説が現れると考えられる。

しかし，ケベックでは，近代化が進む中でなかなか現実を直視する小説が現れなかった。伝統的価値の象徴性にすがる傾向が，『木流しの大将ムノー』に見られるように，一九三〇年代まで主流を占めている。ケベック小説は本質＝真実らしさを現実のかなたに見出そうと努めてきた。その傾向は，現実を見つめようとし始めた時にも，根強く残る。確かにケベックでも，『三十アルパン』を転換点として，一九四〇年代に入ると都会を舞台として現実社会を客観的にみつめなおそうとする『束の間の幸福』のような現実主義小説が書かれる。ところが，この作品は例外で

あり，伝統的価値に代わる新たな意味を現実社会に見出すことができずに，ケベック小説は外的現実よりも個人の内的葛藤へと向かう。それがいわゆる「心理小説」である。

農村で自給自足的な生活を送っている限り，経済を支配している英系カナダ人との接触は日常生活においてほとんどなかった。しかし，工業化とともに都会に出てきた仏系カナダ人は嫌でも英系人との接触は避けられなくなる。教会を中心に自分たちの村に留まっている限り，保証されていた彼らのアイデンティティが脅かされ，新たな探求が始まる。仏系カナダ人は，当初伝統的価値観に相変わらずすがることによってしか，新しい状況に対峙することができなかった。現実社会の物質的価値よりも，精神面の高潔さを説くカトリック教会の教えに頼ろうとしたのである。経済的に英系カナダ人に対して従属的な立場に置かれている現実はあまりにきびしかったのであろうか。しかし，伝統的精神論に頼っているだけでは現実を変えようもないことを彼らも悟っていく。伝統を支えるカトリック教会を離れて彼らに何ができるのであろうか。北米大陸という広大かつ強力な英語世界の中に孤島のように取り残されている現実から出発する限り，彼らのアイデンティティの探求は「心理小説」に表されているように非常に困難なものであろう。

心理小説は現実を直視する困難さを反映している。それは親の庇護からなかなか自立できない子供の心境にも似ている。ケベック社会は実際聖母マリアに抱かれる幼子キリストのイメージにしばしば喩えられる。しかし，ケベックはそこに安住していたわけではない。そこから抜け出そうとする努力，それこそが心理小説の葛藤の実態であろう。それは困難ではあるが，新たな一歩を踏み出そうとする意志の現れでもある。その一歩が徐々に道を切り開き，60年代の「静かな革命」に繋がっていくのである。

2．作者と作品

作者のガブリエル・ロワはマニトバ州ウィニペグにあるサン・ボニファスというフランス系住民地区で一九〇九年に生まれた作家である。中等教育を受けた後，教育学を修め，小学校教員を経て，一九三〇年に故郷に戻る。そこの小学校で三十七年まで教鞭を執るが，生徒の多くは移民の子であり，英語もフランス語も理解できない子もいたという。その経験がのちに『わたしの心の子どもたち[9]』で描かれることとなる。彼女の夢は俳優になることで，教員をしながら，演劇活動を続けていた。マニトバ北部のプチット・プール・ドーで最後の教員生活を過ごしたあと[10]，夢を追って十八ヶ月間ヨーロッパへ演劇を学びに行く。この旅行で演劇への夢を断ちきり，帰国後マニトバには戻らず，モントリオールでジャーナリストになる。こうして，モントリオールなどの都会ばかりでなく，西部カナダの移民や，ケベック各地のルポを書くようになった。一九四五年に第一作『束の間の幸福』を出版すると，四十六年にアカデミー・フランセーズ賞を受け，四十七年にはアメリカでも大成功を収め，ケベック文学史上文字通り空前絶後のベストセラーとなった。同じ年にフランスのフェミナ賞を受けた。この作品は英語を始め多くの言語に訳され，作者の作家としての地位を固めた。一九五二年以後は，いくつもの旅行を続けながら，ケベック

市に住み，一九八三年に生涯を閉じる。

彼女は幼いころから少数派のフランス系カナダ人として英系の人々を身近に見て育ち，また，多くの少数派の移民の子どもたちと接してきた。その結果，農村にいる限り外部との接触が少なく，また州内では多数派であるケベックのフランス系の人々とは違った視点を彼女が持っていても不思議ではあるまい。英系と仏系の間にある深い溝を彼女は客観的に見つめていたと考えられるだろう。英系を単純に敵視するだけでは現実は何も変わらない。「生き残りの哲学」に見られるような精神論に陥ることなく，現実を直視しようとする態度が『束の間の幸福』には見られる。

この小説では作者の意見が露になることはなく，登場人物の考えも極力外から客観的に描かれ，また，余分な説明がなされることもない。登場人物の内面の葛藤に焦点をあて，それを内面から描く心理小説との違いは明らかだと思われる。フロランチーヌの苦しみ，ロザンナやアザリウスの貧困は，彼女，彼らの内面から描かれることはない。つまり，彼らの精神的苦悩が，内的独白や会話，話者の説明によって暴露されることはない。これら登場人物の苦しみを表すのに，彼らの行動，環境を描いているのである。『束の間の幸福』はケベック文学には稀な本格的リアリズムの小説なのである。

3．梗概

フロランチーヌ・ラカスFlorentine Lacasseはレストランでウェイトレスをしている娘である。彼女の一家はモントリオールの労働者街，サン・アンリ地区で貧しく暮らしている。客のジャン・レベックJean Levesque は，フロランチーヌに惹かれているが，素直に気持ちを表すことができない。彼は自尊心が強すぎるのである。フロランチーヌの父のアザリウスAzarius は夢ばかりを追っている失業寸前のタクシー運転手である。父が頼りにならないので，フロランチーヌの稼ぐ僅かなお金が一家の重要な収入源である。

フロランチーヌの一家が貧しい生活を送っているのは戦争が始まるまでの不景気によるところが大きい。アザリウスは夢ばかりを追っているなまけ者のようだが，彼は元は家具職人として結構稼いでいた時期もあった。会社が倒産してから，自分で事業を始めては失敗を繰り返し，タクシーの運転手をしているが，自分で車を買って独立することを考えている。

長男のユジェーヌEugeneは仕事を見つけることができないままでいる。一家はフロランチーヌの稼ぎに頼らざるを得ない。母のロザンナRose-Anna はそんな暮らしを嘆きながらも耐えている。大家から，まもなく立ち退きを要求されているので，頼りにならない夫に代わって，彼女が必死になって貸家を探して回る。ユジェーヌが母に話しをするときは，お金の無心か何かあるときだけなのだが，ある日，彼は軍隊に志願するつもりだと母に打ち明ける。 収入を得るためにはそれしかないからなのだ。

ジャンはフロランチーヌに惹かれ，また，フロランチーヌもジャンに惹かれているのだが，二

人とも素直に気持ちを打ち明けられない。ジャンは自尊心と強い上昇指向から，フロランチーヌに抱いているのは愛情ではなく，憐れみであると考えようとする。フロランチーヌの方では，ジャンが本気なのかどうか分からず，冷たい態度をわざと装う。最初のデートの時，フロランチーヌはしゃれたレストランでの食事に有頂天になっているが，ジャンはフロランチーヌの様子を伺い，その洗練されない態度にすぐに気づく。しかし，ジャン自身，そうしたあか抜けしない様子は自分たちフランス系カナダ人全体に通じるものであることを理解しているはずであり，フロランチーヌに感じている憐憫はそう簡単に払拭できるものではないのである。ただ，ジャンは自分の野心の方を大切にしょうとしているのである。最初のデートですでに二人の距離をはっきりジャンは悟り，フロランチーヌと別れようとしている。フロランチーヌの幸福はまさにタイトルどおり「束の間の幸福」なのである。

数日後，ジャンは，志願兵になった友人のエマニュエルを連れてフロランチーヌの働くレストランに行く。そして，エマニュエルをフロランチーヌに紹介し，自分は身を引こうとする。エマニュエルはフロランチーヌが気にいったようでパーティーに招待する。あまり気乗りがしないが，ジャンに会えるかと期待して，フロランチーヌはエマニュエルの家のパーティーにでかける。ジャンは現れず，フロランチーヌは落胆してしまう。エマニュエルの両親に紹介されるが，あまり気にいられてないようで，ますますいづらくなる。エマニュエル一家は，フロランチーヌのラカス家よりもずっと裕福であり，フロランチーヌの両親を知る彼の両親は，貧しい家の娘であるフロランチーヌをよく思っていないようである。しかし，エマニュエルは両親の考えを意に介せず，フロランチーヌに愛を告白する。

冬が終わり，アザリウスの気紛れで，ロザンナの実家のある田舎にメープル・シロップ狩りに行くことになる。この大変な時期に，ロザンナは乗り気ではないが，子供たちは大喜びだった。フロランチーヌは家族について行かず，一人家に残る。彼女は家族がいなくなる機会を待っていたのである。フロランチーヌはジャンを家に誘い，こうして肉体関係を持ってしまう。しかし，ジャンは，すぐに後悔をし始める。この野心家の青年は，下町の娘に心を奪われていては出世など望めないと考えているのである。彼とて，フロランチーヌと別れ難いのだが，結局町を出る決心をする。

他方，幼いダニエルはメープル・シロップ狩りに行ったあとさらに病気が重くなって，モン・ロワイヤルにある小児病院に入院させられる。アザリウスのすることはいつも裏目に終わる。結局ダニエルは数日後白血病でひっそりと死んでしまう。

ラカス一家は家賃を払えないため，新しい家を探すが，なかなか適当な所が見つからず，ロザンナはあちこち歩き回らねばならない。そんな中，彼女はまた妊娠していることを知る。他方，フロランチーヌは，ジャンとの関係を母に悟られ，家出する。フロランチーヌはジャンを忘れられないのだが，ジャンはすでにサン・アンリを去っている。とうとう，新しい借家人が来て，一家と同居し始める。やっとのことで，見つけた家は線路脇で，一家は騒音と煙に悩まされる。ロザンナの赤ちゃんが生まれ，家族がまた増える。しかし，去って行くものもいる。長男のユジェーヌと同様，父アザリウスも出兵することになる。アザリウスは，赤ん坊の出産により，現実に

目覚め，お金のために志願兵になったのである。

一方，フロランチーヌはエマニュエルの熱心さに負けて，結婚する。ジャンを忘れてはいないのだが，エマニュエルとの結婚が惨めな生活から抜け出す最後のチャンスであることを，フロランチーヌはよく理解しているのである。しかし，それも，束の間の幸せなのかもしれない。夫となったエマニュエルも弟ユジェーヌ，父アザリウスと共に，ヨーロッパ戦線に行ってしまうのだから。こうして，この小説は三人の乗る列車がモントリオールを去って行く場面で終わる。

不安と希望がいりまじったこの結末はケベックの将来をそのまま暗示しているのかもしれない。死んでいったダニエルに変わって，新たに赤ん坊が生まれて来た。また，フロランチーヌからジャンは去っていったが，エマニュエルが言い寄って来た。ヨーロッパへ出征していく三人は身を危険にさらすわけだが，残った家族には不安とともに希望も残していく。

4．現実が見える人物・見えない人物

『束の間の幸福』に現れる多くの登場人物は現実が見えていない。その中で，ジャン・レベックはこの小説でただ一人現実が見えている人物である。まず，ジャン・レヴェックとアザリウスのカフェでの議論の場面を通して二人の違いを検討してみよう。アザリウスはカフェの常連で，店主のサム・ラトゥールや他の常連たちと第二次大戦を巡る議論に夢中である。

「いや」とジャン・レヴェックは言った。「平和主義者は英雄だよ。彼らは自分たちの利益を頭に抱く思想に捧げる人たちなんだ。そういう人をあなたはたくさん知ってますか。僕は，便乗者しか知りませんね。ほら，戦争が始まってまだ六ヵ月だけど，どれだけの男ががすでに便乗してることか。軍隊に職を得る者を始めとしてね。一日に1ドル30セント，たいした額じゃない。でも，大衆を動かすには充分だ。それから，今どきの武器弾薬工場の男たち，彼らに関係ないと思いますか，戦争が。上から下まで，幅を効かしているのは利益なんだ。皆が便乗者なんだ。あるいは，お望みなら，皆の戦争努力を害しないように言えば，皆は愛国者なんでしょうね。」
〔・・・・・・〕

アザリウスは運転手用の手袋をはめた。そして，若者（ジャン・レヴェック）を威厳をもってしげしげと見た。

「いつか」と彼は言った。「暇なときに，道で会ったら，乗せてやるぜ。徴兵拒否者には強制収容所があることを，それまでの間忘れんようにな。」

「あんたの言論の自由はどうしたんだね。」と，サム・ラトゥールが笑いながら言った。

アザリウスは，頭を下げ，控え目に微笑んだ。彼は少しもユーモアを失っていなかった。

「そうだな，うん，時は流れる」と，レヴェックをまったく無視して彼は言った。

「さあ，もう，次の列車の時間だ。」

彼の回りでは，会話が再開していた。当たり障りのない，とても控え目な会話だった。

「あんたんとこでは，ましかい?」と，店主が聞いた。

「まあまあだね。もっと悪かったかもしれんからね」と，ラカスが言った。「娘が相変わらず働いてるくれてるからねえ・・・・・・ほら，ちょうどここの向かい，『15セント』の店で。」

「うん。一番上の娘の，フロランチーヌか。ずいぶんあんたの助けになるだろうな，なあ。」

ジャンはその名前を耳に挟んだ。テーブルに屈みこんで，運転手を見つめ始めた。彼は，この男に対して，敵意と本当の好奇心が入り混じったものを感じていた。「理想主義者。無能者」と考えていた。この夢想者の背後に，危うく，不安な家族の生活があることを彼は見抜いていた。(P.48～p.50)

この一節にも見られるように，第二次大戦はケベックにおいても大きな影響を与えていた。舞台は1939～1940年位にかけて，つまり，戦争が始まったばかりの頃なので，戦争の持つ本当の意味，その非人間的性格が一般には理解されていない。戦争により失業者は職を得ようと，また，愛国心という絶好の言い訳の下兵士になろうとする。皆が愚かにも戦争による利益ばかりを考えている。ジャンはそれを皮肉っているのである。彼は冷静に判断しているが，彼の意見はむしろ少数派に属している。また，この場面で，ジャンは初めてフロランチーヌの父アザリウスに出会っている。両者の性格の対照的な様がここでよく表されている。つまり，夢ばかり追っていて現実が見えていない，労働者の典型であるアザリウスと，同じ労働者でありながら，冷静にものごとを考え出世を考えている，野心家のジャンは戦争に対しても正反対の考えを抱いているのである。

ジャンの友人エマニュエルもアザリウス同様現実が見えていない。

「今度戦いに行こうとしてる男たちが銅の小さな勲章以外の物を欲しがっているとでも思っているのか?」(p.62)

これはエマニュエルがフィリベール小母さんのレストランで議論している場面である。軍に入ったばかりのエマニュエルは兵士の制服で店にやって来た。そこで彼は幼馴染みの友人たちと出会い戦争について議論し，従軍する兵士の純粋な愛国心を無邪気に弁護しているのである。友人のジャンとは対照的に，エマニュエルは功利主義的に戦争を捉えていない。彼の考えは，ある意味では純粋，別の見方をすれば単純なのである。もう一度先に引用したジャンとフロランチーヌの父アザリウスのやりとりを見れば，エマニュエルはアザリウスと五十歩百歩の考え方をしていることがわかるであろう。ジャンは，志願して軍に入る者たちの背後に安易な功利主義を，あるいは単純な愛国心を見てとり，その愚かさを批判する。彼はもっと狡猾に生きていこうとしている。それに対して，エマニュエルやアザリウスたち大部分の大衆は，戦争の真の意味を見抜けないでいるのである。しかし，作者自身はどちらかの肩を持ち，他方を批判したりはしていない。あくまで客観的に描ききろうとしている。

次に，ジャンとフロランチーヌが初めてレストランで食事を共にしたあとの帰り道のシーンを見てみよう。

彼女はもう話す勇気がなかった。そして，ときどき苦悩に捕らわれていた。
「彼は私に本当にいい印象を持ってくれただろうか。」
ジャンはそれほどぼんやりしていた。
彼らはサン・アンリ駅の正面にあるノートル・ダム通りの陸橋にさしかかっていた。ジャンは立ち止まった。彼女は彼が山の方に目を上げるのが見えた。その明かりはひと握りの最初の星々とほとんど見分けがつかないくらいだった。
「この山を見たことがあるかい」と，彼はゆっくり言った。
彼女は困って，皮肉な微笑みを浮かべた。この奇妙な若者のことが何も分からないときがあった。それから，彼女の考えは，一瞬の幸福を本当に味わったレストランに飛んでいった。そして，彼と同じように，立ち止まり，手すりに凭れて夢を見た。彼女も山を見ていた。目を雪の中で輝かせ，ちらつく雪で目をしばたたき，彼女は山を見ていた。しかし，彼女がそこに認めていたのは，レストランの大きな鏡と自分の顔，やさしい唇，ふんわりと軽い髪であり，それらはまるで暗い水面に反射しているかのようであった。
ジャンは肩ごしに彼女を見つめていた。今や，彼女を見ても彼はほとんど無関心で，ほとんど落ち着いていられた。彼女にキスしようとはもうほとんど思っていなかった。そして，これでいいのだった。フロランチーヌに対して激しく抗し難い熱情をもう失くして，彼は彼女に自分の野望を打ち明けることができた。彼らの間にある大きな距離を彼ははっきりと彼女に示してやることができた。
彼は娘のか細い手首に手を延ばして，急に笑いだした。
「君はたぶんそんなことは思っていないだろうが，ねえ」と彼は言った。「僕はね，梯子の第一段にまもなく足をかけているだろう。そして，サン・アンリにおさらばだ。」（下線小畑）（p.84 ～85）

サン・アンリ地区はモントリオールの下町でモン・ロワイヤルの丘を見上げる所に位置している。上の引用文で山montagneとはモンロワイヤルの丘Mont-Royalを指している。この名の文字通りの意味は「王様の山[11]」なので，ここでもジャンは「山」と言っているのである。モン・ロワイヤルはモントリオールの中心に位置する小高い丘で，東西に細長くのびた山頂部は現在公園になっていて，展望台もある。南斜面の西側は，ウェスト・マウントと呼ばれ，モントリオールで一番の高級住宅街で，大邸宅が並んでいる。この場面でジャンとフロランチーヌが見上げているのはこのウェスト・マウントなのである。二十世紀に入り工業化が進んでくると，この小説の舞台であるサン・アンリ付近に農村から出てきた労働者が集まってくる。近くのラシーヌ運河沿いに工場，特に繊維工場が増え，そうした工場が人手を必要としたのである。一般のフランス系労働者にとって，経済を握り，ウェスト・マウントに住むイギリス人は見上げるだけの存在であ

り，そこに割って入ろうという野心を持っているものは少なかった。モントリオールにやって来たイギリス系の人々は，商工業の中枢を占め，裕福な生活をウエスト・マウントで送っていた。北斜面の東側，つまり，町の中心のちょうど裏側にはウートルモンOutremont，直訳すれば「山向こう」という地域がある。ここはフランス系住民の高級住宅街になっている。南斜面が当然日当たりも，眺望もよく，町の中心にも近く，地の利がある。こんなところにも，フランス系とイギリス系の差が現れている。また，南斜面の東側にはカナダで一番古い歴史を誇るマッギール大学のキャンパスが広がっている。北側斜面西側にはフランス系のモントリオール大学のキャンパスがある。英語系，フランス系を代表する二つの大学を比べても，英語系のマッギール大学の方がずっとよい場所を占めている。イギリス系がフランス系を長く支配してきた歴史がここにも感じられる。元来，フランス系住民はメイン・ストリートであるサン・ローラン通り（英語ではセント・ローレンス通り）の東側に主として住んでいた。ビジネス街や華やかな商店街は西側の英語系地域に集中していた。モントリオールの中心は元々は港に隣接する現在のオールド・モントリオールにあったが，その発展とともに，徐々に西へ移動していったのである。

多くのフランス系労働者はイギリス系との格差に目をつむり，抑圧された状況に苦しむだけであった。ジャンはそうした状況を乗り越え，成功を夢見る数少ない若者である。彼にとって，フロランチーヌは，憐れみの対象ではあっても，彼の夢を理解できない，彼にはそぐわない娘なのである。ウェスト・マウントを見上げながら，野心を燃やすジャンとは対照的に，フロランチーヌは同じ山を見ながら，レストランで今しがたすごした「束の間の幸福」を反芻するばかりで，「山」が象徴している現実，イギリス系にフランス系が支配されている現実に目を向けず，夢を見ているのである（二番目の下線部）。最初の下線部が示しているように，フロランチーヌにとって，ウェスト・マウントの家々の明かりは，手の届かない星のようなものなのである。

それに対して，ジャンはこの最初のデートでフロランチーヌをじっくり観察し，彼女が本当にどんな娘なのか見極めようとしている。

「どうして，僕はこの娘をここに連れて来たんだろう」と，テーブルの端をつかんで，彼（ジャン）は思った。「うん，分かってる，もう何度も考えた。彼女のありのままの姿を見るため，そして，どんな幻想も抱かないためだ。」(p.83)

レストランへ向かう電車の中でも，ジャンは彼女を「試すように見ていた」(Jean l'examinait)。最初のデートの別れ際にジャンとフロランチーヌの違いはもう決定的になっている。

ゆっくりと彼ら（ジャンとフロランチーヌ）はまた歩き始めた。それぞれが自分の考えを辿っていた。彼らの考えは反対に流れていた。まさに正反対なので，彼らはもう一生理解し合うことはできないだろう。

ジャン「もう，僕は彼女には会わない。おお，多分あと一度か二度は，少しも後悔しないように会うかもしれない。でも，すぐに終わらせなければ・・・・・・」

そして，フロランチーヌ「彼を何とかして家に誘わなければ。」(p.86)

このように，『束の間の幸福』で，現実が見えているのはジャンだけである。フロランチーヌも，アザリウスも，エマニュエルも，現実を正面から捉えることができないでいる。この三人の人物は夢を見ることによって，現実から逃避している。それは，『グリーン・ゲーブルズのアン[12]』のアンにも似ている。ただし，成長して行くアンとは違って，彼らは最後まで現実を直視することはない。

さらに，母ロザンナは現実に打ちひしがれ，夢を見ることさえできない。四十を過ぎているのに九人目の子どもを妊娠していることをフロランチーヌに告白した後で，ロザンナは娘に「仕方ないだろう，フロランチーヌ，人生は思うようにはならないんだよ。なるようにしかならないのさ」(p.90) と言う。母ロザンナはマーガレット・アトウッドが指摘する犠牲者の二番目の態度の典型であろう[13]。犠牲者であることは認めるが，それが運命であり，受け入れるしかないと諦めているのである。これは，当時のフランス系カナダ人を代表する態度でもある。

それに対してフロランチーヌは「嘘よ。わたしは思うようにやってみせるわ。母さんのように貧乏にはならないわ。」(p.90) と考え，「幸せを約束する音楽に夢心地で包まれているように」ジャンとの初デートの思い出に浸っている。また，ジャンの子どもを身ごもったままエマニュエルと結婚しようとするフロランチーヌに，結婚式の朝，ウェディング・ドレスを着るのを手伝ってやりながらロザンナは「間違ってると思うなら，好きで結婚するんじゃないなら，誰か他に好きな人がいるなら，遅くないんだよ」と諭す。しかし，フロランチーヌは「ほっとおいてよ。一人で着られるから」と言い放つ (p.345)。フロランチーヌは，エマニュエルとの結婚にサン・アンリを去り幸せをつかむチャンスをかけているのである。彼女やアザリウスの態度はアトウッドの言う第三の態度だと言うことができよう。つまり，犠牲者の立場に甘んじることなく，何とかそこから脱しようとするのである。が，現実と対峙することなく，抑圧の真の意味を問うにいたらなければ，「夢」もいつかは覚め，幻滅から第二の態度に後戻りとなるであろう。実際，結局志願して軍に入らざるをえないアザリウスも，エマニュエルと結婚したフロランチーヌも，将来は決して明るいものではないだろう。

5．見えにくい現実

ジャンのように現実が見えている人物は例外なのかもしれない。フロランチーヌやロザンナやアザリウスたちがむしろ当時のケベックを代表する人物なのであろう。エマニュエルはその中間に位置している。彼は現実の意味を問うが，答えを見いだせないでいる。この小説の最後でヨーロッパ戦線に出征することになった彼は「なぜ自分は出征するのか」自問し始める。そして，彼はフロランチーヌに尋ねる。

「どうして，君のお父さん，君のお兄さん，それに僕は出征するんだろうか。君は分かるかい？」と彼（エマニュエル）は尋ねた。

彼女（フロランチーヌ）は驚いたような目をして，彼を見た。

「あんた，どうしてあんたたちが志願したかってききたいの？」

「そうだ。」

「そうね，わたしに分かるのは一つのことだけ。あんたたちが志願したのはあんたたちのしたことってこと」と彼女は落ち着いて言った。

彼は彼女を黙って長い間じっと見つめた。そうだ，もっと早く考えるべきだったのだ。彼女の方が民衆に近い。彼女の方が民衆を知っている。本当の答えを持っているのは彼女なのだ。彼は視線を群衆のほうに上げる。そして，フロランチーヌが与えた答えが何千もの溜息を通して聞こえるかのようであった。(p.378)

エマニュエルは正義感から軍隊に入ったのだが，志願するものの中には，お金のためのものもいれば，偏狭な愛国心からのものもいる。彼は各人がそれぞれの目的を持って志願しているのは理解できても，社会全体の中で戦争がどういう意味を持っているのか理解できないでいる。現実に対して，その問題点を見つめながら，ジャンほど功利的に考えることができないエマニュエルは，フロランチーヌやアザリウスと同じ答えを採用しないのであれば，当面は自問し続けるしかないのである。

6．キッチュの定義

キッチュの定義は簡単ではない。というよりも，様々な対象に対して，多様な方法で説明がなされうる。それは，キッチュが一定の芸術様式ではなく，対象と人間のあり方に関わるものであり，ある効果，ある現象の類型を指すからだろう。アブラアム・モルは「キッチュとは，人と物との間の関係の新しい一つの型だ[14]」と述べている。マテイ・カリネスクは「キッチュは単一の定点からは定義できない・・・・・・われわれは，キッチュ効果ということを，それ自体としてはなんらキッチュ的でない事物の組み合わせについても語れる[15]」と論じている。エヴァ・ルグランは，「キッチュという概念は単に特定のものや，文体や，趣味に結びつけられるものではない。キッチュを『悪趣味』の同義語とするのはその意味の広がり，深さを極端に制限してしまう。キッチュとはまず哲学的，存在論的な範疇であり，それは人類の根本的な欲求の表現なのである[16]」と言う。

しかし，いずれの場合もキッチュとは「偽物」，「借り物」，「複製」といったことを含意し，「虚偽の美学」あるいは「美的な嘘」の諸形態の産物である。カリネスクの言葉を借りれば「美的不適合」さがそこにはたえずつきまとっている。つまり現実をより良い世界の夢（失われた楽園とか輝かしい未来とか）に置き換えようとする欲求の表現なのである。虚飾の鏡に映った自己

の姿に感動したり，出来合いの思想の愚かさを美しい言葉で言い換えたりしてキッチュはわれわれに自己満足を与えるのである。キッチュが結びつくのは感情やエクスタシーなのである。

さらに，キッチュは現実を直接対象とするのではなく，現実のイメージを対象とするのである。認識は生の感動ではなく，感動の模倣に依存することとなる。例えば，『存在の耐えられない軽さ[17]』では，「キッチュは次々と二つの涙を生じさせる。第一の涙は言う。なんて美しいんだ，芝生の上を走る子どもたちはと。第二の涙は言う。なんて美しいんだ，芝生の上を走る子どもたちを見て世界中の人々と感動することはと。この第二の涙だけがキッチュをキッチュたらしめる」(p.361) とされている。

また，クンデラは『存在の耐えられない軽さ』でキッチュを次のように定義している。キッチュとは「存在との断定的な合意」(accord cathégorique avec l'être) であると。その合意は，政治でも宗教でも，あらゆる「信仰」の背後にある合意である。つまり，十字架のキリストも鈎十字も，最大多数の合意，大部隊との連帯の呼びかけを一様に表している。クンデラが左翼の大規模なデモを皮肉に描くのはそのためなのである。現実に愛情の（欲望の）対象をみいだせず，出来合いのイメージにモデルを見いだし，問答無用に合意することによって感動を得るのがキッチュなのである。そうした感動を裏付けているのは，理屈ではなく，多くの者との連帯感なのである。ルグランのクンデラ論を発展させて，われわれは次のように言うこともできるだろう，キッチュの与える感動は，一人でテレビを見ている時に画面から流れてくる笑い声に同調して笑うときの快楽に似ていると。可笑しかろうがなかろうが，多くの人と笑っているという感覚が重要なのである。こうした連帯感は孤独から人間を救うが，それが現実のものではないところに滑稽な悲しさが潜む。キッチュに欠くべからざる要素がこうした感情的熱狂なのである。

7．キッチュの連環

第4章で見たように，最初のデートですでに二人の距離をはっきりジャンは悟り，フロランチーヌと別れようとしている。フロランチーヌの幸福はまさにタイトルどおり「束の間の幸福」なのである。その最初のデートの帰り道の場面をもう一度見てみよう。

ウェスト・マウントを見上げながら，野心を燃やすジャンとは対照的に，フロランチーヌは同じ山を見ながら，レストランで今しがたすごした「束の間の幸福」を反芻するばかりで，夢を見ているのである。思い出はすでにイメージであるが，特にそれがナルシスティックなものであれば，それに浸ることはキッチュな行為である。貧しい生活に追われる現実をフロランチーヌは夢で置き換えているのである。

フロランチーヌの「夢」はレストランから続いている。レストランに入るとともに，彼女は夢の中に入っているのである。

彼ら（ジャンとフロランチーヌ）は照明の抑えられたこぢんまりとしたレストランに入った。

突然，彼女の目の前に，テーブル・クロスの白さと，ガラスの煌めきが踊った。彼女にとってすべてが夢だった。勇気をだして，彼女は夢の中に入っていった。(p.81)

フロランチーヌは若者とデートしていること自体に満足し，ジャンの視線と出会っても，そこに鏡のように映る自分の姿しか見ていないのである（p.79)。フロランチーヌは，現実の惨めな姿から解放され，デートをしている自分に見入っているのである。彼女はジャンに突然強引に誘われてデートに来たのでよそ行きの服を着ていなかった。それで，「新着のドレス，体にフィットして，胸を小さく丸く見せ，腰をほどよくはって見せるドレス」を着て来られなかったことを残念に思い，時間があれば「髪にはピンを，腕にはブレスレットを四つか五つジャラジャラと，ブラウスにもブローチを着けて来られたのに」と思っている。さらに，初めてのデートなのに着飾っていないフロランチーヌは，せめて化粧でもと電車の中で必死になって手探りで口紅を探す(p.80)。レストランで化粧を直してきた彼女は口紅を分厚く塗り，下品な香水をふりまいている(p.83)。彼女が夢見ている着飾った自分のイメージは安っぽいファッションなのである。それは同じレストランで働くマルグリットたちとの会話などから汲み取られたものであろう。『グリーン・ゲーブルズのアン』のアンにとって夢の源泉は少女の読む書物にあった。その書物の役割をフロランチーヌにあっては大衆文化が担っているのである。ファッションも多くのものとの連帯を確認できるキッチュなものであろう。特にそれが感覚と結びついたイメージである点を考えるならば，書物以上にキッチュであると言える。

8．キッチュを照射する視線

カナダの現実は長くて厳しい冬に代表されるように過酷である。ジャック・ゴドブーはそのため「カナダ映画では想像力が育たず，ドキュメンタリーに見るべき作品が多い」と来日の際語っている[18]。アトウッドも指摘するように，圧倒的に強大な自然，あるいは無慈悲な運命と，それを前にしたときの人間の無力とがカナダ文学の根底に確かにある。フランソワ・パラディが雪の森に迷って死ぬ『マリア・シャプドレーヌ』や動物の悲劇的な死に満ちた『シートン動物記』，土をこよなく愛する農民ユカリストが大地を捨てアメリカ合衆国に移住しなければならなくなる『三十アルパン』やプライドを大事にしてきたヘイガーが年老いた醜い様をさらして死んで行かねばならない『石の天使[19]』を思い起こしてみればそれはよく理解できるだろう。

しかし，カナダ文学にも想像により熱狂する有名な人物がいた。『グリーン・ゲーブルズのアン』のアンである。彼女は過剰な想像力によって厳しい現実を読んだ本になぞらえて自分好みに変えて楽しもうとしている。アンの態度は明確にキッチュである。

『束の間の幸福』のフロランチーヌもアンに劣らずキッチュである。彼女は恋愛そのものよりも，恋をしている自分の姿に酔っている。アンやフロランチーヌにわれわれはキッチュ的自己満足の典型を見ることができるだろう。

キッチュが「より良い世界を夢見る」人間の根源的な営みであるなら，幸福を追求する登場人物はある意味でほとんどすべてキッチュであると言うことができよう。しかし，われわれは，キッチュが「現実そのもの」を対象とするのではなく，「現実のイメージ」を対象としている点に注目しておきたい。従って，キッチュを論じるときには，「視点」や「語りのレベル」や「審級」が密接に関わってくることをわれわれはルグランの論に付け加えておきたい。つまり，ある人物がキッチュであるためには，他の人物がそれを指摘できねばならない。「断定的合意」の虚飾性に誰か気づいていなければならいのである。そういう登場人物がいなければ作者がそれを意識していなければならないのである。さらに，作者が意識していなくても，読者は，批評家は，研究者は，作者を，あるいはその作品をキッチュだとして読むことができる。さらに，そうしたことに気づいていない批評家をキッチュだとして読むことも可能だろう。例えば，夢を現実だと思っている人自体はキッチュではない，それに同調する者がいて初めてキッチュはキッチュ足り得るのである。そうした意味でマリラにはアンが必要なのであり，アンにはマリラが必要なのであった。

『東の間の幸福』ではフロランチーヌを見つめるジャンの目が彼女のキッチュを浮き彫りにしている。その対照性はエマニュエルや他の人物にも適応できるだろう。本稿では論じなかったが，父のアザリウスも多分にキッチュである。実際この小説では，ジャンと母ロザンナだけが現実を見つめている。ただし，ロザンナはそれに甘んじるだけで，その意味を理解することはないが。

『東の間の幸福』の夢見る登場人物は，『アン』のアンに似ている。ただし，成長して行くアンとは違って，彼らは最後まで現実を直視することはできない。しかし，アンがマリラたち村人の一員になることによってキッチュでなくなると同時に島の閉鎖性の虜になる（「島」の美学を共有する）のとは正反対に，彼らはキッチュであり続けることで越境を試み続けている。

現実的なジャンは着実に出世の道を歩むことによって，サン・アンリを脱出することはできたかもしれないが，サン・アンリvsウェスト・マウントという対立項から逃れられたわけではあるまい。彼の態度は支配と非支配，加害と犠牲の枠を少しも揺るがすものではない。既成の境界を越えていくエネルギーはキッチュな態度を照射する視線にこそ孕まれているのではなかろうか。

注

1）René Dionne et al., *Le Québécois et sa littérature*, 1984. p.38-39.

2）Maurice Arguin, *Le Roman québécois de 1944 à 1965,* Hexagone, 1989. p.112.

3）Albert Memmi, *L'Homme dominé*, Gallimard, 1968.

4）Ringuet, *Trente Arpents*, Flammarion, 1938.

5）Félix-Antoine Savard, *Menaud, Maître-draveur,* Librairie Garneau, 1937.

6） Louis Hémon, *Maria Chapdelaine*, dans le Temps (Paris), 27 janvier-19 fevrier 1914; J.-A. LeFèbre, 1916; coll. du 《Nénuphar》, Montréal, Fides, 1980. 邦訳『白き処女地』（山内義雄訳，新潮文庫。1954年初版。1994年復刊。）

7) Roger Lemelin, *Au pied de la Pente douce*, L'Arbre, 1941.

8) Gabrielle Roy, *Bonheur d'occasion*, Société des Editions Pascal,1945. 復刻版 Beauchemin, 1967. なお，本稿では次の版を用いた。ページ数などはこの版のものである。*Bonheur d'occasion*, coll. « Québec 10/10 », Stanké, 1978.

9) *Ces enfants de ma vie,* Beauchemin, 1977.

10) この体験は『プチット・プール・ドー』*La Petite Poule d'Eau*, Beauchemin, 1950.に描かれている。

11) フランソワ一世の命を受けて探検に来たジャック・カルチエがサン・ローラン河を遡って探検し（1535年），当時オシュラガと呼ばれる先住民の集落があった現在のモントリオールに辿り着いたとき，平地の中に長くのびる丘が目を引き，彼はそこに登って周囲を眺望した。サン・ローラン河の中に浮かぶこの島（現在のモントリオール島）を見下ろす丘をフランス王に捧げて，ジャック・カルチエは「王の山」Mont-Royalと名付けた。「王様の」という意味の形容詞として，当時はRoyal と同時にRéalも用いられていた。そのため，Mont-Réal とMont-Royalと両方の言い方が当初はあった。その後，丘の名前としては，Mont-Royalが，町の名前としてはMont-Réal の方が定着して，現在に到ったのである。

丘はモントリオールの象徴であり，中心である。丘の東側を南北に走るサン・ローラン通りは「メイン」とも呼ばれる目抜き通りで，伝統的にこの通りよりも東の地域ではフランス系住民が多く，西の地域は英語系住民が多く住んでいる。

イートンやザ・ベイ等のデパートでフランス語で買い物をすることは1960年代初めまで憚られたというエピソードがこうした状況をよく理解させてくれる。つまり，イギリス系が上流階級をフランス系が下層階級を構成し，上流社会ではフランス語は市民権を得ていなかったのである。

12) Lucy Maude Mongomery, *Anne of Green Gables*. 邦訳『赤毛のアン』村岡花子，新潮文庫。その他いくつかの邦訳があるが，いずれも村岡訳と同タイトル。この邦題は身体的特徴にまつわる差別意識に少々無神経ではあるまいか。原題の直訳は「緑の切り妻屋根（と呼ばれている家）のアン」。ここでは「グリーン・ゲーブルズのアン」とした。

13) Margaret Atwood, *Survival,* House of Anansi Press, Toronto, 1972. 邦訳『サバイバル』，加藤裕佳子，御茶ノ水書房，1995.

14) Abraham Moles, *Psychologie du kitsch*, Denoël/Gauthier, 1977. P.27

15) Matei Calinescu, *Five Faces of Modernity,* Duke University Press, 1987.

16) Eva LeGrand, *Kundera ou La mémoire du désir,* édition XYZ, Montréal, 1995.

17) Milan Kundera, *L'Insoutenable Légèreté de l'être*, Gallimard, 1984.

18) ジャック・ゴドブーJacques Godbout.「明治大学国際交流基金事業報告書」(1999年度)。

19) Margaret Laurence, *The Stone Angel*, McClelland & Stewart, 1964. 邦訳『石の天使』，浅井晃，彩流社，1998。